

文部科学省認可通信教育

# 「社会学」学修指導書

玉川大学



# 「社会学」学修指導書

樋田 有一郎



## はじめに

この学修指導書は、社会学および社会学系の科目を履修する学修者に対して、いくつかのアドバイスを伝えるために作成されている。みなさんがこれから学ぶ社会学は多様な学問であり、標準的な内容が決まっていて標準的な解答を導き出すことを目標とする学問ではない。もちろん、暗記科目でもないし難解な古典理論をひけらかすための術学的な学問でもない。社会学のいくつかのテキストを読み比べてみると、テキストによって扱う内容と論じる視角の違いに驚くことだろう。科目としての社会学の大きな目標の一つは、社会を分析する視座を身につけることであり、学修者のオリジナリティやクリエイティビティを發揮して実際に社会を分析できるようになることである。したがって、学修するプロセスも多様にならざるを得ないだろう。この学修指導書は、さまざまな切り口から学べる社会学を、とくに社会の変化を強く感じ、そして大学で学ぶことの意義を模索している学生のみなさんにとって有意義なものとなるように作成した。社会学者の経験の蓄積から、変化の激しい今の社会を生きる学修者が目の前の社会をより深い問題意識や課題の設定の仕方等で分析する姿勢を身につけるためのヒントを伝えたい。

テキストとして、『よくわかる社会学』ミネルヴァ書房を指

定している。また、分冊はシラバス内で指定しているので確認すること。

ただし、第一分冊、第二分冊の区分は学修の目安として指定したものであり、分冊として指定していない箇所も含めてテキスト全体を学修することが、本科目が要求する学修内容であり、レポートの作成および科目試験の受験のために必要不可欠な学修内容である。

なお、本書は、指定のテキストにくわえて学修者がさらなる学修のために他の社会学のテキスト、論文等を含む参考文献を学ぶことの足がかりとなることも想定した内容とした。

## 科目の定義と位置づけ

本科目の定義と位置づけは下記である。履修者は、よく読んで理解するようにしてほしい。

玉川大学は教養豊かな幅広い知識をもち、基礎学力の堅固な基盤と高度な専門能力を持った有意な人材を育成するために、ユニバーシティ・スタンダード科目群は8つの分野からなるカリキュラム、および学科専門科目群で構成されている。

社会学は学科専門科目群に属している。通信教育の科目記号及び科目番号は「SOC102」であり、科目番号が100番台は入門レベルに該当する。社会学を修得することによって、倫理的思考力、社会的責任がつく、という設定がなされている。

# 目 次

はじめに.....	i
1. 科目の性質.....	1
(1) 社会学ってなんだろう？	
(2) 社会学の広範囲性 — 貪欲に何でも対象にする	
(3) 社会学は科学を目指す — 「こうすべき」と「こうなっている」の区 別をする	
(4) 社会学は時代を捉えようとする — 多様で複雑化する現代社会に挑む	
(5) 社会学の役割	
2. テキストの内容への向き合い方 — 社会学を学ぶきっかけとしてのテキストの利用— .....	12
(1) 複雑な現代社会を考えるきっかけとしてのテキ ストの学修	
(2) 古典を学ぶことの意義 — あの社会学者ならなんと答えただろう	
(3) テキストの内容の解説	

3. 科目試験およびレポート作成の注意	25
(1) 引用をすることの魅力	
(2) 先行研究と自分の議論を区別する意味	
— テキストを丸写ししないで議論する	
4. おわりに	
— 社会学を学ぶことの意義 —	32
(1) 社会学的想像力と知的職人論	
(2) 社会学の学びとこれからの学び	
5. 引用・参考文献	39



# 1. 科目の性質

## (1) 社会学ってなんだろう？

みなさんはどのような場面で社会学に出会ったことがあるだろうか？ テレビのコメンテーターには、社会学者と呼ばれている人が登場し、社会のさまざまな事象を解説したり意見を言ったりしている場面を見ることがある。また、大学でも社会学はさまざまな学問と交流を持つようになったため、他の科目を学んでいるときに社会学に出会ったかもしれない。社会学者のコメントは一般的なさまざまな評論家による発言とどこが違うのだろうか。なぜ、社会学は他の領域と関わりながら広がっていくのだろうか。

社会学とは、何だろうか？ 実はこの問いに対して、社会学者でも簡単に答えることができないと言われる。大学で学ぶ他の科目、例えば法学や経済学や商学や教育学などの何を領域とするかが比較的是っきりした科目と比べて、社会学は非常に漠然とした社会という対象しか示していない。社会学は曖昧さゆえに勉強するのが難しい側面がある反面、自由に学ぶことができる。学修者はこうした社会学の性質をなんだかよく分からないという人と面白いという人とに分かれるようである。本書で

は、そうした社会学の特徴をいくつか紹介し、楽しく身につく学修につながるようにしたい。他の科目と共通するような一般的な学修の仕方については省略し、社会学の学修が充実するためのきっかけとなるようにしたいと思う。

## (2) 社会学の広範囲性 —— 貪欲に何でも対象にする

社会学の特徴として、「広範囲である」ことがあげられる。社会学が対象とする内容は極めて広範囲かつ多様である。

社会学の多様性を実感するにあたって、社会学や広く社会学に関連する学術研究領域を対象とする学会がいくつあるかみてみよう。日本学術会議という科学者たちの公的な集まりがあり、一般にその協力学術研究団体として指定されることで「正式に認知された」学会であるとみなすことがある。この協力学術研究団体にどの学会が含まれるかは、学会名鑑 [<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/>] という日本学術会議他が運営するウェブサイトから検索することができる。そこで「社会学」のキーワードで検索すると、100を超える社会学に関連する学会が見つかる（ぜひ実際に検索してみてどんな学会があるのか調べてみよう）。さらに、図書館の社会学の本棚に行ってみよう。〇〇の社会学というタイトルの本がたくさん見つかるはずだ。〇〇の部分にはこんなものまで社会学なの！？ と驚くものもあるは

ずである。それは、社会学が社会の事象という広範な対象を研究しているからであり、高度に細分化・専門化しているからであると言えるだろう。社会学者のなかには、半ば自嘲気味に「社会学者の数だけ社会学がある」と言うこともある。下記はよく見る社会学の分野の一部である。下記のような〇〇社会学のことを、連字符社会学と呼ぶ。

芸術社会学	歴史社会学	エスニシティの社会学
農村社会学	政治社会学	ジェンダーの社会学
労働社会学	国際社会学	スポーツ社会学
情報社会学	言語社会学	社会学の社会学
組織社会学	文学社会学	音楽社会学
教育社会学	医療社会学	犯罪社会学
青年社会学	経済社会学	地域社会学
都市社会学	家族社会学	軍事社会学
宗教社会学	老年社会学	感情社会学
産業社会学	知識社会学	法社会学

では、なぜこれだけ多くの社会学が存在するのだろうか。それは、社会学を特徴付けているのは方法が社会学的だということである。そして社会学の方法によって、社会のなかの具体的なヒト・モノ・コトや抽象的な慣習や制度や構造を広く対象とすることができるからである。社会学は、みなさんの身近なこ

とから社会全体のこと、あるいは自分とは普段関わらない社会についても扱う。このことは、難しさと親しみやすさの両側面を持った学問であることにつながる。

### (3) 社会学は科学を目指す ——「こうすべき」と「こうなっている」の 区別をする

社会学の二つ目の特徴として、社会学は自然科学（狭い意味での科学）をめざすことがあげられる。分析対象が社会であるため、その成員である私たちは、社会に対してこうすべきだという思いを持つだろう。この点が学修者を混乱させる要因になり学修の妨げになる。社会学では社会が事実としてどのようなか、何が実際に観察できたのかという点から議論をスタートする（実証主義）。社会学を学ぶ際に、こうすべきといった価値や規範をつくるための議論（当為論）と、こうなっているという事実をめぐる議論（存在論）を意識的に区別して、社会を分析する態度を重視してほしい。

社会学の他の学問との比較による位置づけは常に問われてきた。社会学の歴史を振り返ると、社会学は文学と科学のあいだでどのような位置づけを取るのかが問題となってきた。学問を、人文学、社会科学、自然科学と分類する際には、社会学は、社会科学の一つに位置づけられることが多い。社会科学は大まか

に言って人間の営みを研究対象とする学問領域であるため、社会学もたしかにそのうちの一つに含まれることは自然な考え方である。しかし、社会科学に分類される諸学問の中でも社会学は、自然現象や物理法則を分析対象とする自然科学（狭い意味での科学）を志向している側面が強い。みなさんが、世界史で習ったフランス革命に大きな影響を与えたサン・シモン（1760-1825）の弟子でもあった人物で、社会学の父と呼ばれることがあるフランスの社会学者にオーギュスト・コント（1798-1857）がいる。彼は、物理学が自然界に万有引力の法則があることを発見したように、社会学も社会現象の中に何らかの客観的な法則を見つけ出すのが社会学のありかただと考えていた（社会物理学）。こうした社会を客観的な観察対象である社会的事実〔エミール・デュルケム（1858-1917）〕として扱うという社会の認識態度はその後の社会学全般に色濃く受け継がれていった。

社会の成員である私たちは誰でも、社会について語る事ができる。「最近の若者は〇〇だ」「日本人は〇〇だ」「この地域は〇〇だ」「昔と違って〇〇になった」これらはみな社会を分析しようとしたときに発せられる言葉である。しかし、日常的に現れるこうした社会の評論は、このままでは社会学と言えない。前述のように社会学は、社会のなかの現象を対象として、社会学の方法で分析しようとする。科学的であろうとすると、社会学は、対象を客観的に見ようとする。客観的とは、分析しようとする私たちの価値観に自覚的になり、それにこだわらず誰

もが納得するように自身の持っている価値から自由になりながら〔ドイツの社会学者マックス・ヴェーバー（1864-1920）〕対象を見つめることを意味する。そのためには、社会学は分析するための方法がより一般的であり、より思い込みが含まれていないように注意しようとする。価値自由や客観性を重視する社会学は、日常的な社会評論から離れようとする。自然科学が実験室で厳密に対象を分析するように、社会学、とりわけ初期の社会学は社会を対象として科学的な分析をできることを理想とした。

#### （４）社会学は時代を捉えようとする ——多様で複雑化する現代社会に挑む

社会学は、時代を捉えようとする問題意識（歴史的な問題意識）をもとにして発展してきたという特徴がある。社会学を学ぶ際に出会う概念や理論を理解するには、その概念や理論が社会の何らかの変化を明らかにしようとする問題意識から生まれたことを意識することが重要である。前述のコントらが社会学をスタートさせた当時のフランス社会は革命による政治的な変動が生じ、キリスト教の教義の影響を受けた中世的な世界が崩れ始め、科学の力や合理性への信頼が高まっていく大きな社会変動の時代であった。コントが経験したフランス革命の時代は、みなさんが高校の世界史で学んだように劇的な社会変化が生じ

た時代であった。啓蒙主義のもとに、既存の宗教的権威を否定され、社会のあらゆる不合理や身分制を否定され、市民社会が作られようとする時代であり、その過程は一筋縄にはいかず多くの血が流れた。また、その時代は、産業革命が起きつつある時代であり産業構造も劇的に変化する時代であった。このように二つの近代化の社会変動を背景に現れたのが、前述の社会学の実証主義的な態度であった（近代化をめぐる社会学者の諸議論についてはテキストを参照してほしい）。みなさんが社会学のテキストを読み進める上で、難解な概念や理論に出会うことがあるが、そうした際は、なぜそうした概念や理論が必要なのか、その概念や理論によってその社会のどのようなことを明らかにしようとしているか、とくにどのような社会変動に向き合おうとする議論なのかに意識を向けてみるとよいだろう。

さらに、みなさん自身の現代社会に対する問題意識をもとに社会の分析を行ってほしい。最新の社会学の議論を学ぶ際には、これまでの社会を説明してきた諸議論だけでなく、現代社会を分析しようとする議論が行おうとしていることにも注目してほしい。みなさんの生きる社会は変化の激しい社会だと言われる。社会学の議論では、すでに今の社会は近代化が完了した後の社会であり、これまでの社会の変化とは大きく違う変化が生じようとしているという考え方がなされることも多い。みなさんが感じているように、これまでの変化のパターンとは異なる社会変動が速い速度で生じている。問題が複雑化、個別化する近代

化の後の時代の社会（「ポストモダン」とか「現代社会」とかこれまでの社会と区別するための呼び方をすることもある）をどのように捉えるかの議論が盛んになされている。自身の問題意識を出発点として、さまざまな研究者が現代の社会を捉えようとする議論と比較しながら、みなさん自身が生きる社会をどのように捉えるかを考えてほしい。

## （５） 社会学の役割

いくつかの社会学の役割を社会学者と一緒に紹介しておく。社会学が生まれてから100年以上経ち、前述のように社会学はあらゆるものを研究対象としてきた。また、近代化の中で社会学の目的も変容してきた。みなさんには、社会学教育の場でよく語られる社会学の役割からいくつかを紹介する。みなさん自身にとっての社会学を学ぶ意義を見つけてほしい。

### ・常識をくずすための社会学

社会学の社会的な役割はたくさんあるが、典型的なものは、「脱常識」だろう。アメリカの社会学者ランドル・コリンズ（1941-）は、社会の常識をそのまま受け入れるのではなく根本から疑うことで、社会の真の構造を明らかにしようとした。みなさんが、普段あたりまえあるいは合理的に感じていることをラディカルに疑って隠された社会の構造を明るみにすること、



常識を疑うことが伝統的な社会学の仕事である。私たちの日常生活にはさまざまな慣習や制度や構造が隠されている。疑うことは社会の構造を私たちの目の前に明るみに出す。

さらに、疑うことは他者を理解することにつながる。あなたの常識は必ずしも他の人の常識とは限らない。あなたの常識はあなたの所属する集団や部分社会に埋め込まれたものであり、全く違う文化圏の人々を理解するためには自身の常識を疑う必要がある。疑うことは他者を理解することにもつながるのである。

・ 社会政策や政治的討論に貢献するための社会学—社会学は社会の会計士（社会会計士）である—

社会学は、さまざまな社会政策を総合的に分析することができる。そのため、社会学は政策科学として積極的に社会に貢献することができる。みなさんが、ニュースで見聞きするあらゆる政策について、それを評価し、問題点を指摘し、改善点を提示することに社会学は貢献する。イギリスの社会学者アンドリュー・ヘンリー・ハルゼー（1923-2014）は現代社会における社会学の役割を、「社会会計士」と呼んだ。ハルゼーは、政治的な議論をする際の、合意形成や利害調整、政策の結果や副作用の測定といった合理的な討論を行ううえで、社会学が説明責任を果たすべきだと考えた。社会学は、政策科学としての役割を果たし、民主主義の発展に寄与すべきだという考え方である。

・社会を変えるための社会学—社会学は格闘技だ—

「社会学者に一つの役割があるとすれば、それは教えを垂れることよりも武器を与えることでしょう。」

(ブルデュー 1991 : 121)

社会学は、常識を疑い社会の真の構造を明らかにする。そのことは、社会の政策を作ることに貢献する。そして、伝統的に重要であった社会学の役割は反権力である。社会の中の、さまざまな権力の構造を明るみに出し、支配され抑圧される我々の姿を明るみに出す。フランスの社会学者ピエール・ブルデュー(1930-2002)は、貧しい家に生まれフランス最高峰の学術研究機関であるコレージュ・ド・フランスの教授となった。ブルデューは社会の中の不平等やその再生産が行われる過程に注目し、それらが正当化されている社会構造を明らかにしようとしたことで有名である。ブルデューは自身の経歴から、社会の中の目に見えないが我々を支配する権力や束縛に対して怒りを持って(アンガジェして)暴き出すことを行ってきた。社会学は、怒れる者たちが、そうした社会の構造と戦うための方法である。

・公共性・市民を作るための社会学—新しい時代の社会学の役割—

アメリカ社会学会の会長を務めたマイケル・ブラウオイは、社会学は公共社会学 (public sociologies) としての役割を果た

すべきことを強調した。前述の政策科学としての社会学にたいして、社会学の役割は市民との対話や連帯のための役割であると考えた。社会学が政策にこたえるための道具として発達し、高度に細分化している現状をかえりみて、これからの社会学の役割は、市民の連帯を促すための学問であるという考えである。

以上のようにさまざまな社会学者によってさまざまな社会学の役割が主張されてきた。この他にもさまざまな社会学の役割があることが主張されている。このように社会学の役割が多種多様であることは、個々人が世界のあり方についておぼろげながらも持っている信念や問題意識や価値理念（アメリカの社会学者の A.W. グールドナー（1920-1980）は背後仮説と呼んだ）が多様であるからだろう。

みなさんが社会学についての本や論文を読むときには、そこで直接主張されている個別具体的な現象に関する仮説にくわえて、その社会学者が世界のあり方についてどのような信念・問題意識・価値理念を持ち、社会学はどのような役割を果たすべきと考えているかにも着目し比較検討するとよいだろう。このことについては、第2章の「(2) 古典を学ぶことの意義 —— あの世界の社会学者ならなんと答えただろう」でも関連して触れる。

## 2. テキストの内容への向き合い方

### —社会学を学ぶきっかけとしてのテキストの利用—

社会学のテキストへの向き合い方、つまり学修の手引きについて触れておきたい。とくに近年のテキストの内容の特徴である、さまざまな事例をあつかうことの意味とそうしたテキストへの向き合い方のヒントについて触れる。さらに、テキストの中で出会う社会学の古典との向き合い方について述べたい。最後に、指定したテキストに関して若干の解説を述べる。

### (1) 複雑な現代社会を考えるきっかけとしてのテキストの学修

みなさんには、いちど、図書館や書店で社会学のいくつかの教科書の目次を見比べてほしい。法学や経済学のベーシックとされる教科書と比べると、内容の多様さ、逆に言うと統一性のなさに驚くかもしれない。

近年出版される社会学のテキストの傾向として、教育学で言うところの順序だって配置された学習内容（社会学概念）を紹介していく系統学習的なものが減り、さまざまなテーマを豊富な事例に基づいて問題に迫っていくイシュー型、問題解決学習

的なものが増えつつある。社会学のテキストは、著者による知識の教授から、視点の提示による読者の主体的な学びを促すものへと変化しつつある（「テキスト革命」とも呼ばれる）。

系統学習から問題解決学習への転換の背景の一つには、目の前の社会の問題を解き明かそうとする社会学にとって、現代の多様化する社会を統一的に説明することが困難となり始めたからだろう。多様化する社会を前にして、社会学の中で必ず学ばなければいけない統一的な理論や扱わなければいけない対象はこれまでと比べて減りつつある。

社会学者の盛山和夫は現代の学生が本を読まなくなったことの理由を次のように評した。

「『学生が本を読まない』という現象の背景にあるのは、『読む価値のある本がない』という感覚である。すなわち、大きな物語という知の地平を形作るものが消えてしまったため、そもそも『読む』ことを意義づけることが難しくなってしまったのである。」

盛山和夫, 2017, 「公共社会学は何をめざすか」  
『社会学評論』68（1）：2-16

ここでいう「大きな物語」とは近代の物語をさしている。かつての大学生なら誰でも当たり前のように読むべきとされていた理論や古典であり、その当時の社会を考えるにあたって共通

に理解すべきものをさしている。みなさんも年配の教員から「今の大学生は〇〇すら読んでいない」と嘆かれた経験もあるかもしれない。しかし、前述したように近代化を大きなテーマとしてきた社会学（近代性の社会学）は、近代化が完了した現代では、問題が多様化・複雑化した。現代では共通に学ぶべきものが消失した。

では、みなさんはどのようにテキストを読めばいいのだろうか？

これまで説明してきたような、社会学のテキストが概念を教授することから読者による学習へと移行したことにたいして批判がなされている〔野村（2003）など〕。しかし、筆者は肯定的な側面もあると考えている。共通に学ぶべき内容が消失したと時に、現代の大学生は何を何のために読むのだろうか。それは、社会学にかかわらずみなさんが他の科目やあるいは現代社会のさまざまな場面で要求されていることと同じである。不確定な現代社会では、みなさんはさまざまな場面で、定まった唯一解は与えられず、個別の状況や自身の考えによって最適解を見つけることが求められている。テキストを使って自身の観察できる実際の社会を考え経験的に学んでいくことである。現代社会では、人々は知の消費者から、知の生産者になろうとしている。社会学のテキストは、その訓練となる。大切なのは、まだ何か分からない目の前の社会現象に対して、鋭敏な感覚と学んだ知識を総動員して、向き合っていくことである。その為の道具が、

みなさんが読むテキストである。さらに踏み込めば、社会学の教科書には、背後仮説に執筆した社会学者の生き様や人生論が現れている〔野村（2003）〕。みなさんには、社会学者の人生論に自らの人生論を対峙させて社会を題材に主体的にテキストを読み解いてほしい。

また、現代の学習者が置かれている状況とテキストの利用法について付言したい。テキストはぜひ特定の事象について調べて学ぶ上での出発点としてほしい。みなさんは、インターネットが普及して情報が爆発的に増え、大量の情報を高速に取捨選択する時代に生きている。さまざまな視点からの大量の情報があふれるのは現代社会の特徴だろう。そうした時代では、レポートを作成するにあたって、インターネットで適当に検索して情報を寄せ集めた「内容のない、それっぽいの」をこしらえるのは容易だろう。テキストには研究の流れや先行研究の整理がなされているので、そうした時代だからこそ、テキストをスタート地点として活用して豊かな問題意識を育て、そして、積極的に情報収集をして学修を進めてほしい。

## （2） 古典を学ぶことの意義

——あの社会学者ならなんと答えただろう

「彼は僕なんかはるかに及ばないくらいの読書家だったが、死後三十年を経ている作家の本は原則として手にとろう

とはしなかった。そういう本しか俺は信用しない、と彼は言った。

「現代文学を信用しないというわけじゃないよ。ただ俺は時の洗礼を受けてないものを読んで貴重な時間を無駄に費やしたくないんだ。人生は短い」

村上春樹, 1987, 『ノルウェイの森 (上)』

「切り捨てた何かで今があるなら  
「もう一度」だなんて  
そんな我儘言わないでおくけどな  
それでもどこかで今も求めているものがある  
不滅のロックスター  
永遠のキングは  
明日をどう生きてたろうか  
伝説のプロボクサー  
謎に満ちたあいつは  
明日をどう乗り越えたかな」

あいみょん (作詞／作曲), 2020,

「さよならの今日に」 歌詞

みなさんには、テキストの学修を通じてどれか一つでもいいので古典の原典の一冊にあたる機会としてほしい。テキストを読み進めるうちに、「おやっ？」となるような興味を引く理論



にいくつか出会うだろう。そうしたときには、ぜひ原典にあたってほしい。原典にあたる理由は、その理論を背景も含めて正確に理解することにくわえて、その理論を提唱した社会学者の思考様式を身につけることにある。その社会学者が世界のあり方についてもつ信念・問題意識・価値理念（背後仮説）を自らのものとして摂取し深化させることができるとうよい。原典を精読しているうちに、〇〇という社会学者の立場ならば、△△という問題に対してこのように考えるだろうといった感覚が得られるようになるとうよい。つまり、ある社会学者の立場から議論ができるようになるのが理想である。テキストの中で紹介される社会学者の原典すべてを読むことは大学学部の一科目として求められるものではない。しかし、自身のお気に入りの（とっておきの！）社会学者を一人見つけて、その社会学者の考え方を自身の考え方の1つのパターンとして身につける機会とすることは十分可能であるし、そうすれば社会学を履修した甲斐があるだろう。古典の理論は過去の社会を懐かしがるためにあるのでも、難解さをひけらかすためにあるのでもない。時間の流れの中で忘れ去られないだけの理論の鋭敏さを持ち合わせ、現代社会を考えるために残っているのである。ぜひ、社会学を学んだ後には、あの古典の社会学者が生きていたならば、いま目の前の複雑な問題にどう答えただろうと考えられるようになってほしい。

### (3) テキストの内容の解説

指定したテキストの簡単な解説をする。

テキストは、みなさんが興味を持った章から学び始めるのもよいだろう。なお、テキスト内では多くの参考文献があげられているのでぜひ参照して発展的な学びを行ってほしい。

ここでは、テキストをふまえつつ、みなさんに社会学の中で学んでほしい内容を示しておく。ただし、ここで示す内容は導入であり一例なので、本科目の学習内容として指定しているテキストの内容をしっかりと学ぶようにしてほしい。

#### I 社会学とは何か

社会をどのように捉えるかについて学ぶ。社会はどのようにして成り立っているのか、社会とは何なのか、社会はどのようにして認識されるのかといった根源的な問いを考察し、みなさん自身が社会を捉える視点や態度を育てることができるようになることを目標とする。とくに、社会調査に関してはよく学んでほしい。社会調査は、社会学の持つ実際の社会を明らかにしようとする実証性を支える重要な領域であり、社会調査の意義を学ぶことにより社会学の基礎的な考え方を身につけることができる。社会学が明らかにしようとする対象やその問題意識について学んだ上で取り組んでほしい。学修を通じて、なぜ社会を調べる必要があるのか、社会学の役割について考える機会

にしてほしい。また、社会のさまざまな事象を捉えようとするために、社会調査の手法が発展してきたことを学んでほしい。社会学と社会調査の意義について理解し、質的調査と量的調査に大別されるさまざまな社会調査の手法を具体的に検討し、社会の何を明らかにしようとしているかについて意識して学んでほしい。社会調査に関しては、佐藤（2015）なども参照するとよいだろう。

## Ⅱ 〈私〉をめぐる社会学

インナートリップとしての社会学に関して学ぶ。自己と他者、コミュニケーション、第一次集団、社会的自我、集合的記憶等を学ぶ。近年、アイデンティティの喪失や、自分探しが盛んに論じられるようになった。現代社会では、さまざまな局面で「自分とは何か」「自分の価値は」と問わざるをえない場面が多い。みなさん自身が、現代社会の中で自己のあり方を問われる具体的な場面を考えながら学修してほしい。

## Ⅲ ジェンダーとセクシュアリティをめぐる社会学

ジェンダーとセクシュアリティに関連する社会学的な議論を学ぶ。女らしさ・男らしさの問い直し、ジェンダーとセクシュアリティの概念の比較、ジェンダーの社会化、仕事・家族といったさまざまな場面で現れるジェンダー・セクシュアリティの問題、近年議論となり始めたセクシュアル・マイノリティにつ

いて論じる。みなさん自身が強固に規範を内在化しているジェンダーとセクシュアリティについて考えるきっかけとしてほしい。

#### IV 若者と子どもをめぐる社会学

子どもは、近代社会の産物だと言われる。近代以前の子どもは、小さな大人といわれることがある。これは、前近代社会には近代社会ほど大人と区別される子ども特有の何かは存在しなかったということを意味している。しかし、我々の社会では、子どもに特有の現象がたくさん見られる。例えば、我々が当たり前に通う学校は子どもに特有の一つの部分社会であり、そこではさまざまな社会化が行われてきたことをみなさんは経験的に知っているだろう。社会の新たな構成員となる過程にある子どもや若者に関わるさまざまな現象に注目して欲しい。

#### V 家族をめぐる社会学

家族をめぐる社会学的な議論を学ぶ。近代化の中で生じた家族の諸問題、例えば、「結婚の個人化」、「少子化」、「夫婦関係」、「親子関係」、「核家族化」、「脱近代家族」等について学ぶ。社会を構成する単位として機能する家族について、近代化の中で何が問題となっているのか、自身の経験とも引きつけて考えてほしい。家族は、身近な概念であり、近代化の中で大きく変化した事象であり、みなさんが、社会と個人を社会学的に考える上

でよい材料となるだろう。近代化とは何かについて考えながら、家族を捉えようとする先行する議論を整理し、できる限りみなさんが注目した具体的な事象に焦点を置き分析を行ってほしい。理解を進める上で、湯沢・宮本（2008）なども参照するとよい。

## Ⅵ 地域をめぐる社会学

地域をめぐる社会的な議論を学ぶ。アーバンイズム論の系譜、シカゴ学派、コミュニティ、郊外、アンダークラスといったことを題材に、地域についての社会的な議論を学ぶことができる。農村と都市といった社会学の当初の問題意識から出発して、現代的な地域をめぐる議論ができるようになることが目標である。学修を通じて、みなさんには、自身が居住し生活し労働する地域についての省察を行う機会としてほしい。

## Ⅶ 労働・職場をめぐる社会学

近代社会では前近代社会と比べて働くことのあり方が大きく変わったと言われる。そして、みなさんが感じているように現代社会ではさらに働くことのあり方が変わりつつある。みなさんの親世代と比べて自分の世代の働き方が変わりつつあることを感じているだろう。ここでは、社会学の立場から前近代、近代、そしてみなさんの時代における働くことのあり方を考察していく。みなさん自身の働くことへの視点から社会を分析することを試みて欲しい。

## VIII メディアと情報化をめぐる社会学

メディアと情報化をめぐる社会学についての議論を学ぶ。メディアとは何か、メディアの発達と近代化とどう関連するのか、電子メディアの登場、インターネットの発達と公共圏、情報化社会の諸相等について考察を行う。学修を通じて、みなさんには、自身が普段あたりまえに使うメディアの意義について考え、また、新しく登場するメディアが社会に与える影響について考える機会にしてほしい。

## IX 階級・階層をめぐる社会学

階級・階層をめぐる社会学についての議論を学ぶ。社会を分析する基礎的な視点である階級・階層について、社会的地位の測定や、社会階層の閉鎖性・流動性、産業化が階層に与えた影響、格差論等に触れながら学んでいく。階級・階層論は、あらゆる社会の中の事象をグルーピングして「違い」を検討することができる。みなさん自身が日常で経験する、教育、労働、結婚、健康、政治等に関連するさまざまな事象に注目して違いについて検討してほしい。

## X グローバル社会とエスニシティをめぐる社会学

国際社会とエスニシティに関する議論を学ぶ。エスニシティ、国民国家、地域・民族問題、移民、多文化社会について議論することができるようになる。これまで信じられていた、日本の

「単一民族神話」を疑い、移民や国際化について考察する機会としてほしい。

## **XI 社会運動・NPO・ボランティアをめぐる社会学**

社会運動・NPO・ボランティアに関する議論を学ぶ。社会運動の歴史、現代的な社会運動、NPO・NGOと市民社会、ボランティアについて議論することができるようになる。

## **XII いろいろな社会学**

いろいろな社会学について学ぶ。〇〇社会学（連字符社会学）と呼ばれるさまざまな社会学を概観して説明できるようになる。ぜひ、みなさん自身が気に入って今後も学修を続けたいと思える〇〇社会学を見つけてほしい。

## **XIII 社会学の歴史：西欧世界の社会学史**

社会学の歴史について主に西欧を中心に学ぶ。社会学の誕生から始めて、古典的な社会学の展開について理解できるようになることが目標である。一人ひとりの古典の社会学者の問題意識、当時の社会状況について意識しながら学修を進めてほしい。日本の社会学は、西欧の社会学を輸入しながら発展してきたことを指して、しばしば自嘲気味に輸入学問と言われることもある。まずは、西欧社会学がどのように日本の社会学に影響を与えたかに注目しつつ、あわせて日本独自の社会学の展開にも注

目してほしい。



### 3. 科目試験およびレポート作成の注意

一般的なレポート作成や科目試験の受験の対策についての説明は他の科目と大きな違いはないので他の科目の学修指導書に譲ることとする。おそらく学修者の不慣れな点について苦言を呈する記述に関しては既に他の科目の学修指導書で読み飽きていると思うので控えめにさせていただきたいが、そうした細かい注意点や作法については大学においては早く身につけた方が“得”なので真摯に取り組んでほしいと思う。

ここでは、本科目においてとくに重要な点についてのみ説明する。

#### (1) 引用をすることの魅力

大学生が学修・研究をするにあたり必ず学ぶのが「引用」の方法である。引用ができることはアカデミックの世界では当たり前とされている。なぜ引用するのか？ それは、大学で何でも注意されるように剽窃（＝盗作）をしてはいけないからであることはもちろんだが、それ以上にどのような意味があるだろう。大学教育では引用をしなかったことによるペナルティが強調されるがここでは、引用の魅力について触れておこう。前章

で述べたように、情報が大量に溢れる現代では、適切に引用して情報を整理することは、意味のある議論をする上で重要なことである。そのためには、引用の意味を理解し、科学の進展、つまり、これまでの議論を踏まえた上で、新しいことを明らかにすることができるようになることが望まれる。こうしたことを意識しない引用による議論は、既存の議論の蒸し返しだったり、すでに分かっていることの確認だったり、後退した議論となってしまう。

#### ・先行研究に基づいた議論を行うための引用

##### —巨人の肩の上に立つ

(standing on the shoulders of giants) —

前述の古典理論を読むことの意義で触れたように、みなさんは先行研究を行った人の視点から社会を読みとく愉しみを味わうことができる。さらにこのあと述べるように肩の上に立つこともできる。

オンラインの文献の検索サイトである Google Scholar [<https://scholar.google.com/>] のトップページには、上記の格言が記載されている。これは、万有引力の法則を発見したイギリスの科学者アイザック・ニュートン（1642-1727）が次のように使ったことで有名になった。もともとは古いラテン語の語句由来の文言である。

「私がかなたを見渡せたのだとしたら、それは巨人の肩の上に乗っていたからです」

ニュートンが1676年にロバート・フックに送った手紙

この意味は、先人の積み重ねた発見に基づいて何か新しいことを発見することである。科学者が行う研究の意味や研究の魅力を比喩的に示している。巨人とは言うまでもなくこれまでの研究者による膨大な研究蓄積（先行研究）であり、肩に乗るとはあなたがそうした蓄積に基づいて研究することであなたの研究が飛躍することを意味している。もし、みなさんが一人から研究を積み上げようとしても、人間一人の能力や人生の長さはたかがしれているので、どれだけがんばっても先人達が行ってきたことの単なる後追いや繰り返しになってしまう。しかし、先行研究に基づいた議論を行えば、さらなる高みを目指すことが容易にできることを意味している。引用とは、このように先行研究に基づいた議論をしていることを示し効果的にこれまでの議論の上に積み重ねを行うための方法である。引用をすることであなたの議論の土台は盤石となり一気に人類が到達したことのないこれまで以上の高みからの光景を見ることが出来る。そして、いずれは、あなたが行った議論の上に誰かがさらなる議論を展開していくかもしれない。引用とは、こうした科学の積み重ねの作業に参加するための通行証でもある。

## ・引用形式の複雑さと伝えたいこと

まずは、次の形式別の引用（文末の文献一覧）を見てほしい。  
実際の引用はそんなに簡単ではない。

### MLA スタイル

Giddens, Anthony, and Karen Birdsall. *Sociology*. Cambridge England: Polity Press, 2001. Print.

### APA スタイル

Giddens, A. & Birdsall, K. (2001). *Sociology*. Cambridge England: Polity Press.

### Chicago スタイル

Giddens, Anthony, and Karen Birdsall. *Sociology*. Cambridge England: Polity Press, 2001.

引用の形式によって表記がずいぶん違うことに気が付くだろう。科目毎に違う引用形式を求められることもある。重要なのは、なぜそうした引用形式をとるのかの意味を理解することである。引用は、先行研究や根拠となる資料（あわせてソースと呼んでおく）を特定し正確に伝えようとしているのである。違った引用スタイルを比較すると、ソースに関して、どのような要素がどのような形式で正確に特定し読者につたえようとしているのかの工夫が伝わってくる。何を示せば正確にソースを特定できるのかを吟味する中で、引用の仕組みが分かってくるだろう。

実際のところ、社会学内部でも学会や領域によって微妙な引用スタイルの違いがある。引用の形式について指示があればそれに従うべきだが、指示がなかったり、あっても曖昧なこともよくある。ここでは、社会学の引用の方法として、次の3スタイル（引用以外にも注や図表の記載の仕方等の広い書式）を示しておく。日本における社会科学系の最大規模の学会でもある日本社会学会、アメリカ社会学会、および社会科学でよく使われるアメリカ心理学会のスタイルガイドである。また、一部はインターネット上で全文が閲覧可能である。社会科学の分野で何かレポート等を作成する場合で、スタイルの指示がなくて迷うことがあったなら、この3スタイルのどれかを選び、かつ、一つのレポートの中では一貫して選んだスタイルに従っておけば無難だろう。

#### 社会学評論スタイル

日本社会学会、『社会学評論スタイルガイド』

<https://jss-sociology.org/bulletin/guide/>

#### ASA Style

American Sociological Association, American Sociological Association Style Guide

<https://www.asanet.org/asa-style-guide-sixth-edition>

## APA Style

American Psychological Association, Publication Manual  
of the American Psychological Association

<https://apastyle.apa.org/>

また、これらの引用マニュアルは更新されていくので最新版を参照することが重要だ。というのは、これまでなかったソースを引用する時に最新のマニュアルを参照する必要性が生じるだろう。例えば、インターネット上のソーシャルメディアやオンラインで発行される論文（オンラインアクセスジャーナル）や電子書籍などのソースは引用されることは、過去にはほとんど決まりがなかったが、近年引用されることが増加しつつある。みなさんには、積極的に新しいソースを引用して新しい議論ができるようにしてほしい。

実際の学会誌の編集後記を読むと研究者から投稿されてきた論文の引用形式の不備についての苦言を見かけることも少なくない。引用は当たり前の技術だが、それぐらいややこしいのである。

みなさんには、引用することを楽しんでほしいと思う。引用は、科学への貢献の作法だ。あなたが新しいことを見つけたときにそれを人に伝えるための方法である。ぜひ積極的に引用の方法を学んで、これまでの議論を超えてわかったことを適切に人に伝える達人になってほしい。

## (2) 先行研究と自分の議論を区別する意味 ——テキストを丸写ししないで議論する

レポート作成や科目試験の受験は、教科書の学修と提示された文献を読み込めば十分に対応することができる。ここでは、より実践的に社会学について学び、身につけるために挑戦するポイントをあげたい。具体的なある現象を、社会学の方法で考えるとどうなるかを重視して学修を進めることが重要な準備となる。その際は、できる限り、自身のオリジナルな視点を大切にすることが重要である。身近な問題から始めて素朴な問題関心を大切にしてほしい。その上で、そのことについての先行研究を調べてみるようにする。その際は、これまでの研究と比べて自身の問題関心はどのように同じであったり違ったりするかを吟味してほしい。そうすると、これまでの研究に対して何らかの意見を言いたくなるだろう。これまで述べたように、社会科学のどんな研究も必ず、その研究が行われた時代の問題意識や思い込みの影響を受けている。これまでの研究をできる限り乗り越えることを目指してほしい。このようにすることで、社会学に対する理解が深まるだけでなくより実践的な社会的な思考を身につけることに繋がり、レポート作成や科目試験の受験の対策となるだろう。

## 4. おわりに

### —社会学を学ぶことの意義—

#### (1) 社会学的想像力と知的職人論

社会学を学ぶ上で最も大切なことは何だろうか？ と聞かれたらば、筆者は社会学的想像力を鍛えることと答える。社会学的想像力とは、『社会学的想像力』を著したアメリカの社会学者チャールズ・ライト・ミルズ（1916-1962）が提唱した、個別の問題を社会構造上の問題に位置づけながら考えることを示す社会学者の取るべき重要な姿勢や方法である。社会学の勉強を進めると、みなさんがこれまでの人生で出会った私的（個人的）な事象は何らかの形で社会学の研究対象になっているのに気がつくだろう。みなさんがこれまで受けてきた教育や育った家族内での出来事、働くなかで出会った私的な事柄は社会の構造上の出来事、公的な出来事として社会学の研究対象とされている。社会の中で出会ったことを一つ一つどうしてそうになっているのだろうか？ と考えることは社会学を始める第一歩である。また、ミルズは大学での教育のあり方への関心が高かったため、ミルズの議論は社会学を学ぶ姿勢にくわえて、大学でリベラル・エデュケーションを学ぶことの姿勢について学生や若い研



究者にとっての示唆に富んでいる（高橋 2018）。社会構造に埋め込まれた私たちにとって、社会学的想像力を身につけることは「現代社会の重荷に圧倒されることのない勇敢で懸命な個人」（高橋 2018）になることにつながる。

社会学的想像力を身につけるためのヒントに関して、ミルズの著書『社会学的想像力』の付録「知的職人論」で論じられている。原文と伊奈・中村（2017）の翻訳版をもとに要約・改訳した。少し長いが下記に引用しておく。

#### 「知的職人論」（『社会学的想像力』付録）要約

1. よき職人たれ。決まり切ったやり方に拘泥するな。なによりも、社会学的想像力を発展させ使おうとせよ。誰もが自分自身の方法論者になり、誰もが自分自身の理論家になろう。
2. 自分に対しても他人に対しても、平易で明確な言い方を求めよ。不明瞭な表現を使って社会について曖昧に表現したり、読者からの批評を受けるのから逃げてはいけない。
3. 自分の研究に必要なだと考える超歴史的構築を行え。歴史の副次的な詳細も徹底的に調べよ。できるだけうまく、まったく形式的な理論を作り、モデルを組み立てよ。
4. 一つの小さな生活圏（≡事例、状況）のみを次々研究してはならない。生活圏が組織されている社会構造を研究せよ。生活圏と構造の相互作用を理解できるような方法でそれらを研究せよ。

5. 目標は、世界史のなかに現れたことがある社会構造と、いま存在している社会構造の十分に比較された理解であることを知れ。奇妙な専門用語や専門知識に惑わされず、人間と社会に関する賢明な研究を利用して想像力豊かにあなた自身の研究をせよ。
6. 歴史の諸問題、個人史の諸問題、個人史と歴史が相互作用する社会構造の諸問題についての、自分の見解を作り上げ、修正し続けよ。個性の多様性と、時代の変動様式に目を配れ。見るものや想像するものを、人間の多様性の研究にとっての手がかりとして使え。
7. 自分が古典的社会分析の伝統を受け継ぎ進めていくことを知れ。だから、人間を、孤立した断片ではなく、それ自体がわかりやすい分野あるいはシステムでもないものとして理解すべく努めよ。自分の研究を少しでも、二〇世紀後半の人間社会の恐ろしくもありすばらしくもある世界を理解するという課題に向けよ。
8. 多くの私的問題は、公的問題の観点、歴史形成の問題という観点で理解せねばならないことを知れ。私的問題と公的問題、個人史と歴史、それらの複雑な関係の広がりの中で個人の人生と諸社会の形成が起こるのであり、その広がりの中で、社会学的想像力が現代の人間の人生の性質に変化をもたらす。

Mills, C. W., [1959] 2000, "On Intellectual Craftsmanship."

pp. 195–226 in *The Sociological Imagination*. Oxford University Press. (伊奈正人・中村好孝訳, 2017, 「知的職人論」『社会学的想像力』筑摩書房) を要約・改訳

## (2) 社会学の学びとこれからの学び

社会学を学ぶことでみなさん自身が何か具体的な問題や個人的な問題をただちに解決できる専門的な能力を身につけられるわけではない。また、社会学は単に社会について漠然と禅問答してへえ～となるためのトリヴィア学問ではない。これまで述べてきたように社会学は、具体的な問題と大きな構造に対峙するための手段である。学修を通じて身につけられる考え方の枠組みや社会学的想像力は、現代社会の答えの無い複雑な問題に取り組む際にも有用だろう。

みなさんが、大学（あるいは大学を卒業した後）でさまざまな問題に取り組むにあたって、どう努力すればいいのか、あるいは努力しているのに何をやっているかわからなくなってしまうことも多いだろう。ここで一つ例をあげよう。川で泳いでいるときに溺れないコツは何だろうか。それは、一つには泳ぐ技術でありプールで具体的な泳ぐ技術を練習して高めることである。しかし、それだけでは不十分である。川には上流と下流や浅瀬や深みや岩や急流やよどみがある。そうした川の全体像を掴まなければ、どれだけ泳ぐ技術が高くても溺れてしまう。間

違った方向に泳いではどれだけ力強く泳いでも実際の複雑な川の中では溺れてしまうだろう。必要なのは川全体を見通す力や川の中での自身の位置を把握する力である。これは自分自身が溺れそうなときに必要な能力だけでなく、大切な誰かが溺れそうなときに助けるためにも必要な能力である。日本の教育は長いこと根性主義や努力主義が強調されすぎることがあったとも言われるが、現代社会を生きるためにはそれだけでは不十分である。高校までの学習と違って大学以降の学びは答えのない問いに対して自身の視点を持って切り込むことが求められる。また、社会がますます流動化し複雑化する現代では、問題に取り組むにあたり私たちが要求される視点の斬新さは増している。この作業はこれまでと比べて格段に難しい勉強であり探究である。こうしたとき、社会学は、問題を社会的な視点で構造化し自身の立ち位置や主張を社会の中に位置づけて考えることを助ける。社会学の学修を通じて、本科目のみにとどまらないあなた自身の個人的であり社会構造的な物事に、面白くそして自由に切り込む視点を身につけてほしい。

最後に、本来の順番と前後するかもしれないが、本書をどのように使ってほしいかについて若干付け足したい。

仕事をしている研究者がどのように研究を進めているのかという話を本人から聞くほうが、重要な研究をほとんどや

ったことのない専門家による大量の「手続きのコード化」よりも、たいていの場合ずっとよいと彼は考える。考える経験を積んだ者が自分の実際の仕事のやり方について情報を交換する会話によってのみ、方法と理論の実用的な感覚が初学者に伝わる。

Mills, C. W., [1959] 2000, "On Intellectual Craftsmanship." pp. 195-226 in *The Sociological Imagination*. Oxford University Press. (伊奈正人・中村好孝訳, 2017, 「知的職人論」『社会学的想像力』筑摩書房)

テキストには、十分に学ぶ価値のあることが書かれているので読んでほしい。また本書には指導書としてテキストとは別の役割が期待される。本書は、入門書として社会学のいくつかの考えを概説するだけではなく、みなさんそれぞれが社会学を学ぶための姿勢を育むうえでの一つの参考の資料となるように作成した。指導書として定められ要請された要素に応えつつ、他の科目の指導書と比べて踏み込んだ内容としたのは、みなさんに社会学を好きになってほしいからである。そのために本書は、筆者の個人的な意見を伝える記述を行った。なぜ、個人的な意見を伝えるのか。ミルズが言うように抽象的なテキストよりも経験の伝達が初学者には有意義な場合があり学修指導書の内容と役割として適切だと考えたからである。残念ながら筆者は経験を深く積んだ研究者ではないが、みなさんよりも少し先輩の

個人的な意見が参考となることを期待したい。部活動で熟練した監督やコーチの指導を受けるのも役に立つが、先輩から教わることが実践にはしばしば役に立つこともある。そのような位置づけを本指導書に持たせたいと考えた。

社会学という科目との出会いが、みなさんがさまざまな物事を探究する姿勢を自ら育むきっかけとなることを願う。

## 5. 引用・参考文献

### 書籍・論文

- 赤坂真人, 2013, 「社会の発見（Ⅲ）—社会学の誕生」『吉備国際大学研究紀要．人文・社会科学系』（23）：29-39.
- Bourdieu, Pierre, 1980, *Questions de sociologie*, Paris: Éditions de Minuit. (田原音和監訳, 安田尚・佐藤 康行・小松田儀貞・水島和則・加藤真義訳, 1991, 『社会学の社会学』藤原書店.)
- Burawoy, M., 2005, “For Public Sociology,” *American Sociological Review*, 70 (1) : 4-28.
- Collins, Randall, 1982, *Sociological Insight: An Introduction to Nonobvious Sociology*, : Oxford University Press. (井上俊・磯部卓三訳, 1992, 『脱常識の社会学—社会の読み方入門』岩波書店.)
- Halsey, A. H., 2004, *A history of sociology in Britain: science, literature, and society*, : Oxford University Press. (潮木守一訳, 2011, 『イギリス社会学の勃興と凋落—科学と文学のはざままで』世織書房.)
- 樋田大二郎・樋田有一郎, 2018, 『人口減少社会と高校魅力化

- プロジェクトー地域人材育成の教育社会学』明石書店.
- Mills, C. W., [1959] 2000, "On Intellectual Craftsmanship." 195-226 in *The Sociological Imagination*, : Oxford University Press. (伊奈正人・中村好孝訳, 2017, 「知的職人論」『社会学的想像力』筑摩書房.)
- 村上春樹, 1987, 『ノルウェイの森 (上)』講談社.
- 野村一夫, 2003, 「ネットワーク時代における社会学教科書の可能性」『フォーラム現代社会学』 2 : 6-13.
- 斉藤悦則, 2005, 「社会学者の憤り方ーブルデューに学ぶ」斎藤悦則・荻野昌弘編『ブルデュー社会学への挑戦』恒星社厚生閣, 87-109.
- 佐藤郁哉, 2015, 『社会調査の考え方 上・下 巻』東京大学出版会.
- 盛山和夫, 2017, 「公共社会学は何をめざすか」『社会学評論』 68 (1) : 2-16.
- 園田茂人・山田真茂留・米村千代, 2005, 「テキストづくりの論理と力学」『社会学評論』 56 (3) : 650-63.
- 鈴木洋仁, 2014, 「そのテキストの読者は誰か?」『書評ソシオロゴス』 10 (1) : 1-17.
- 高橋肇, 2018, 「C. Wright Mills のリベラル・エデュケーション論」『紀要』 (48) : 1-20, 札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部.



宇都宮京子編, 2009, 『よくわかる社会学』第2版, ミネルヴァ  
書房.

湯沢雍彦・宮本みち子, 2008, 『新版 データで読む家族問題』  
日本放送出版協会.

## ウェブサイト

American Sociological Association, “American Sociological  
Association Style Guide”, (Retrieved March 15,  
2022, [https://www.asanet.org/asa-style-guide-  
sixth-edition](https://www.asanet.org/asa-style-guide-sixth-edition)).

American Psychological Association, 2019, Publication Manual  
of the American Psychological Association,  
Seventh Edition, (Retrieved March 15, 2022,  
<https://apastyle.apa.org/>).

学会名鑑, (2022年3月15日取得, <https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/>).

Google Scholar, (2022年3月15日取得, [https://scholar.google.  
com/](https://scholar.google.com/)).

日本学術会議社会学委員会社会学分野の参照基準検討分科会,  
2014, 「大学教育の分野別質保証のための教育課  
程編成上の参照基準 社会学分野」24, (2022年3  
月15日取得, [http://www.scj.go.jp/ja/member/  
iinkai/daigakuhosyo/daigakuhosyo.html](http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigakuhosyo/daigakuhosyo.html)).

日本社会学会, 「社会学評論スタイルガイド 第3版」, (2022年

3月15日取得, <https://jss-sociology.org/bulletin/guide/>).

### 楽曲歌詞

あいみょん (作詞・作曲), 2020, 「さよならの今日に」.

### 映画

ピエール・カルル (監督), 2001, "La sociologie est un sport de combat" (社会学は格闘技だ).

「社会学」学修指導書

2020年4月1日 初版  
2022年4月1日 第2版

版權  
所有

編集兼  
発行者

小原 芳明

東京都町田市玉川学園6丁目1番1号

発行所 玉川大学教育学部教育学科通信教育課程 郵便番号194-8611番

